

「なぜ、生きている方を」井上隆晶牧師

I コリント 15 章 44～50 節、ルカによる福音書 23 章 50～24 章 8 節

### ①【キリストの埋葬】

アリマタヤの町出身の身分の高い議員ヨセフは、イエス様の遺体を渡してくれるようにローマ総督ピラトに願い出て、遺体を十字架から降ろし、亜麻布で包み、まだ誰も葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めました。ここには「遺体」という言葉が三回（52、53、55 節）出て来ます。キリストは単なる幻ではなく、本当に実在した方であり、本当に死んで葬られたのだという事を丁寧に書いているのです。人は死んだら終わりです。もう何もできません。すべてが終わるのです。しかし、人がこれ以上何もできないところから、神ご自身のわざが始まるのであり、人の手を一切借りないところで、神は新しいことを始めるのだということ聖書は教えようとしています。私たちは、いつも人間のわざがすべてだという世界に生きており、神の世界を知らないからです。それほど私たちは生活の中から神を追い出し、神を無視して生きており、「神などいない」という悪魔の毒に麻痺しているのです。「その日は準備の日であり、安息日が始まろうとしていた。」

（54 節）とルカは書きます。すべてが終わった日は、何かが始まろうとしている準備の日なのだと、ルカは語るのです。

### ②【生きておられる方＝神のこと】

婦人たちは週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香油を持って墓に行きました。週の初めの日とは、今でいう日曜日のことですが、当時はまだお休みではなく、仕事が始まる日でした。見ると、墓石がわきに転がしてあり、中に入ってもイエス様の遺体は見当たりません。途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人が現れます。これは天使です。彼女たちが恐れて地にひれ伏すと、天使は「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだ、ガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出しなさい。人の子は必ず、罪人たちの手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」（5～7 節）と言いました。

「生きておられる方」というのは聖書では神のことです。よく預言者たちが「主は生きておられる」と語りますし、神ご自身も「わたしは生きている」と語っています。だからキリストは神なのです。だから殺されても死なないのです。キリストを人間の中に捜してはいけません。そこには見つけられません。人間と同等のレベルに落としてはいけません。彼こそが本当に生きている方、本物の神人であって、比べ物にならないのです。聖書では神以外に生きておられる方はおらず、神から離れた人間はすべて霊的な意味で死んでいると語ります。枝が幹から離れたら枯れるように、命の源である神から離れた人は、みな死んでいるのです。こ

の世の人は大変な思い違いをしています。この世に命があって、来世には死んだ人が行くと思っています。実際は、この世は罪と死に満ちている世界です。今の破壊し続ける世界を見たら分かるでしょう。神の国に行くことは、命の元に帰ることなのです。神の世界には死はありません。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神だからです。だからキリストの元に来なさい。彼だけが命を持っているからです。彼と結ばれる人は永遠に生きるのです。

### ③【キリストは死を滅ぼした】

では復活とは何でしょう。仏教のように靈魂が天国に行くことではありません。墓には遺体はありませんでした。キリスト教の復活とは、魂だけでなく肉体も蘇ることを言います。魂と肉体の両方が死なないものになり、天に属する体になることです。パウロの言葉を借りるなら「自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。」(I コリント 15:44) です。「霊」という言葉を使うと幽霊のようなものだと思ってしまうますが、「神の体、天に属する体」という意味です。キリストは受け取られた人間性を、新しい体にされたのです。

人間は本来、死ぬようには造られていませんでした。命である神は死を創造しなかったからです。死は人間の罪によって始まりました。人間は毎日罪を犯しますし、毎日人は死んでゆくので、人間は罪を犯すことに慣れ、死にも慣れてしまったのです。死は日常的なこと、当然なことだと思っています。死に麻痺したのです。しかしキリスト教は、死は異常であり、神の敵であると宣言します。「最後の敵として死が滅ぼされます。」(I コリント 15:26) と書かれています。神が創らなかったものは必ず、この世から抜き取られます。神はこの死を滅ぼすために人間になりました。人間の体を持たなければ死ぬことはできないからです。そして神自らが人間性をもって死を体験し、死の世界に飲み込まれ、内側から死を破壊したのです。古代の聖土曜日の祈祷文はこう伝えています。

●今日、地獄は呻いて呼びます。わたしがもし、マリアから生まれた者を受け入れなかったならば、わたしにとって良かったであろうに。彼はわたしのもとに来て、わたしの権能を滅ぼし、青銅の門を破り、わたしが先に捕らえた様々な魂を、神として復活させたからです。

金曜日に、キリストの葬りの式をしました。死んだキリストが描かれた布の四隅を四人の人が持って、教会の周りを歌いながら、お香を振って葬儀の行列をしました。夜の8時くらいでしょうか。死の暗闇の中をキリストと共に歩いている感覚になりました。そしてとても嬉しくなったのです。私たちは一人で死ぬのではありません。キリストと共に死の闇の歩くのです。だから怖くありません。「死の陰の谷を行くときも、私は災いを怖れない。あなたが私と共にいて下さる。」(詩編 23:4) を思い出しました。こんな死の世界まで来てくれる神がいるということがとても嬉しく感じたのです。

#### ④【人類を復活させることは神の仕事であること】

●昨年 4 月に永眠されたカトリックのフランシスコ教皇が、死ぬ前に書いた手紙があります。「この世のすべての愛する子どもたちへ。私は今日、この人生を通り過ぎる者として、小さな告白を一つ遺したいと思います。毎日、顔を洗い、身だしなみを整え、鏡の前に立って生きてきました。その姿が「私」だと信じていました。しかし、振り返れば、それはただの一時的にまとう衣でした。私たちはこの身体のために、時間を使い、お金を使い、愛情と情熱を注ぎます。美しくありたい、老いたくない、病気になりたくない、そして…死にたくないと願いながら。ですが、結局この身体は、私の願いにかかわらず、太り、病み、老い、そして静かに私から離れていきます。この世で、本当に私のものと呼べるものは、一つもありません。…この世の出来事は、すべて、それぞれの流れに従っています。私たちができるのは、その流れの中で少しの余白を与えることです。少しの譲り合い、少しの思いやり、少しの控えめさ。それが誰かにとって温かな息抜きになります。そして、その温もりが、世界を再び、包み込む力となるのです。…静かに振り返ると、この人生は、感謝に満ちた奇跡のような旅でした。どうか、あなたの人生にも、このような静かな奇跡が訪れますように。…」

「静かな奇跡」という言葉を聞いて、イエス様の復活を思い出しました。なぜイエス様は静かに復活なさったのだろうと、私はずっと疑問でした。それは力を抜いて完全に父なる神様にお委ねされていたからだと思います。嵐の中で眠っているイエス様のように。人を復活させるのは神のわざです。人間は何もできないのです。フランシスコ教皇は静かに自分の人生を振り返って、人間のわざというものは本当に小さく「余白」のようなものなのだと気がついたのです。自分の体でさえも老いや死を止めることはできないのですから。人のわざが本流ではないのです。本流は神様のご計画なのです。人がどんなに邪魔をしても、神の計画は静かに進みます。それはこの世から悪と罪と死を取り除き、人間を死なないものにし、この世界を元の状態に、さらに優れた神の王国に造り変えることです。

モーセはイスラエルの民にこう告げました。「落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。…主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。」(出エジプト 14 : 13~14) 私も皆さんに告げます。

「落ち着いて、あなたたちのために行われるキリストの救いのわざを見なさい。主があなたたちのために死と戦っておられる。あなたたちは静かにしていなさい。

安心して眠りにつきなさい。目覚めたときには、死はもう終わっている。」

死の終わりを祝いましょう。神キリストの救いのわざを讃え、賛美しましょう。出かけて行って死の終わりと、命の始まりを多くの人に伝えてゆきましょう。